市内遺跡発掘調査報告 20
日田市埋蔵文化財調査報告書第 141 集

下道遺跡

２０２２年

日田市教育委員会

下道遺跡
日田市埋蔵文化財調査報告書第141集
２０２２年
日田市教育委員会

日田市

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association

序　　文

日田市は、北部九州のほぼ中央、大分県の西部に位置し、周囲を山々に囲まれ、そこからの豊富な水が清流となり、市の中心となる日田盆地を潤しております。この水が澄んでいることが「水郷日田」と呼ばれる所以であります。

また、こうした自然環境は、人々が生活する上で適していたとみえ、日田盆地からは、人々の生活した痕跡を示す遺跡が絶え間なく、そして数多く発見されております。

さて、本書は、個人住宅建築工事に伴って日田市教育委員会が平成 29 年に実施した下道遺跡の発掘調査の内容をまとめたものであります。

下道遺跡は、日田盆地東部、標高 86m 前後の三隈川右岸沖積地上に位置しており、今回の調査では、古代の溝が確認されました。

この一帯には、古代の官衙関連遺跡などが広がっていることから、当該期の遺跡の広がりを知る上で貴重な発見となりました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や地域の歴史を学習する上での教材、学術研究等にご活用いただければ幸いでございます。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係者の方々、作業に従事いただきました皆様方に対しまして、心から厚くお礼申し上げます。

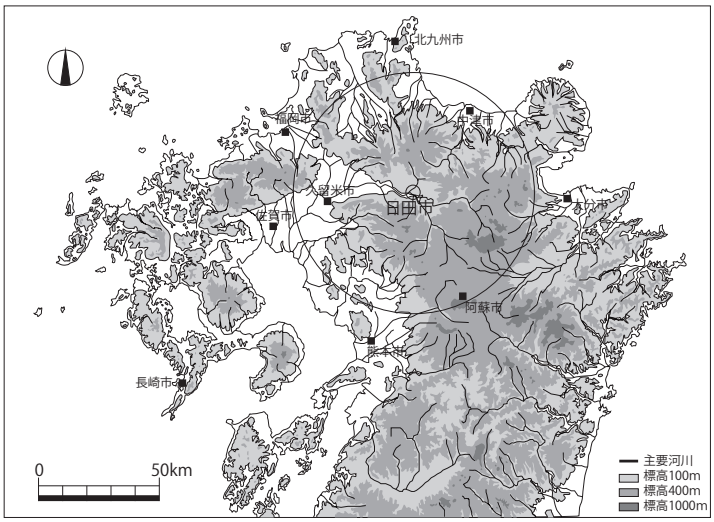
令和　4年　3月

日田市教育委員会

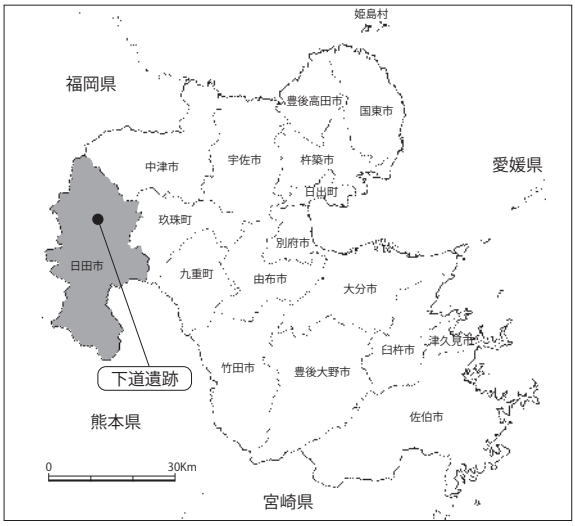
教育長　三笘　眞治郎

例　　言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成 29 年度に発掘調査した下道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、個人住宅新築工事に伴い、国・県・市の補助事業（市内遺跡等調査事業）として日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査現場での遺構実測は株式会社九州文化財総合研究所に委託し、現場での写真撮影は担当者が行った。
4. 本書に掲載した遺構製図、遺物実測・製図及び遺物写真撮影は、雅企画有限会社に委託したものを使用した。
5. 挿図中の方位は全て方眼北を示し、座標については世界測地系に基づいている。
6. 写真図版の遺物に付した数字番号は、全て挿図番号に対応する。
7. 出土遺物及び図面・写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
8. 本書の執筆・編集は上原が行った。



日田市の位置



大分県の行政地区

本文目次

Ⅰ　調査に至る経過と組織
（１）調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
（２）周知の埋蔵文化財包蔵地 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
（３）調査組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
Ⅲ　調査の記録
（１）調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（２）遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
Ⅳ　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（1/20,000） 3
第２図　調査地周辺図（1/2,000） 4
第３図　確認調査出土遺物（1/4） 4
第４図　確認調査トレンチ配置図（1/500） 4
第５図　調査地全体図（1/100）、小土坑断面図（1/60）
及び東壁土層図（1/40） 5
第６図　１号溝実測図（平面図：1/80、土層図：1/40） 7
第６図‐１　調査区南壁土層図（1/40） 7
第６図‐２　１号溝土層断面図（1/40） 7
第７図　１号溝出土遺物（1/4） 8
第８図　２号溝実測図（平面図：1/80、土層図：1/40） 8
第９図　小土坑出土遺物実測図（1/4） 9
第10図　検出時出土遺物実測図（1/4） 9

写真図版目次

写真図版１
遺構検出状況（東から）
遺構検出状況（南から）
調査地発掘状況（東から）
写真図版２
調査地発掘状況（南から）
基礎１完掘状況（北から）
基礎２発掘状況（北から）
写真図版３
基礎４発掘状況（北から）
基礎５発掘状況（北から）
基礎８発掘状況（南から）
写真図版４
基礎９発掘状況（南から）
基礎10発掘状況（南から）
基礎12発掘状況（南から）
写真図版５
調査地東壁土層断面（西から）
１号溝土層断面（西から）
１号溝土層断面（北から）
写真図版６
１号溝発掘状況：基礎７（東から）
１号溝発掘状況（北から）
２号溝土層断面（南から）
写真図版７
出土遺物

表目次

第１表　出土土器観察表 10

本文写真目次

写真１・２　作業風景 1
写真３　確認調査出土遺物状況 1

Ⅰ　調査に至る経過と組織

（1）調査の経過

平成29年4月4日付けで平倉建設株式会社(以下､開発業者)より日田市教育委員会教育長三笘眞治郎(以下、教育委員会）あてに、淡窓1丁目315-2についてモデルルーム新築工事に先立つ埋蔵文化財の所在に関する照会文書が提出された。この開発予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である日田条里遺跡に該当し、その取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を同年4月7日に行った。その後、同年4月10日に開発業者より文化財保護法の届出と予備調査依頼が提出され、これを受けて教育委員会は、同年5月10日から19日にかけて重機と作業員による予備調査を実施した。

予備調査の結果、4本のトレンチから竪穴遺構、溝状遺構、土坑などを検出し、遺跡の存在が明らかになった。この調査の結果を元に開発業者と協議を重ねたが、工法の変更などが困難であることなどを理由に開発業者はモデルルームとしての工事を取り止めた。

その後、個人住宅の新築工事として文化財保護法の届出が提出され、再度開発業者と可能な限り遺跡の掘削が及ぶ範囲を縮小するよう協議を重ねた。その結果、建物基礎によって遺跡の掘削が及ぶ範囲を中心に発掘調査を行うこととなり、平成29年8月9日に事業主より発掘調査の依頼を受け、同年9月14日から10月28日までの間、発掘調査を実施した。また、平成30年5月1日から5月31日まで整理作業を行い、同年12月に遺物実測等の委託を実施した。その後、令和3年度に報告書刊行を行った。

現地での発掘調査の経過は次のとおりである。

平成29年9月14日　草刈り及び機材搬入
9月20日　表土除去及び遺構検出作業開始
9月26日　建物基礎の位置出し、掘り下げ範囲設定
9月28日　遺構堀下げ作業開始
10月 6日　調査区北側の壁面破損、水路より現場に水が流入する。
10月 7日　水路補修
10月10日　壁面補修
10月18日　調査地全体撮影
10月26日　機材撤収及び埋め戻し開始
10月28日　現地での作業完了

写真1　作業風景1

写真2　作業風景2

写真3　確認調査遺物出土状況
（第3図1）

（2）周知の埋蔵文化財包蔵地

調査地は、予備調査を実施した時点では、日田条里遺跡に該当しており、本調査時には調査地周辺の小字名を用いて日田条里遺跡下道地区として調査を行った。その後、本調査結果及び周辺の踏査結果を元に令和元年9月24日に遺跡の新規登録を行い、令和元年10月15日付で「下道遺跡」として埋蔵文化財包蔵地としてその範囲（第1図1）が登録されたため、本報告では下道遺跡としている。

（3）調査組織

平成29・30年度及び令和3年度の調査組織は次のとおりである。

平成29年度

調査主体　　日田市教育委員会
調査責任者　　三笘眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調査統括　梶原康弘（文化財保護課長）
調査事務　古賀信一（同埋蔵文化財主幹（係総括）
行時桂子（同主査）、若杉竜太（同主査）、長祐一郎（同主査）
上原翔平（同主任・予備調査担当）
発掘調査担当者　渡邉隆行（同主査）
発掘作業員　小野昭宣、河津モリ、北澤幾子、合原建國美、財津真弓、坂本隆、佐藤継信、長谷部修一、松下宣男、森山敬一郎、和田征二

平成 30 年度

調査主体　日田市教育委員会
調査責任者　三笘眞治郎（日田市教育委員会教育長）
調査統括　梶原康弘（文化財保護課長）
調査事務　安岡佳克（同主幹：係総括）
今田秀樹（同主査）、行時桂子（同主査）、若杉竜太（同主査）
長祐一郎（同主査）
整理・報告書
作成担当者　上原翔平（同主任）
整理作業員　立川幸子、吉田里美

令和３年度

調査主体　日田市教育委員会
調査責任者　三笘眞治郎（日田市教育委員会教育長）
調査統括　吉田博嗣（同課長）
調査事務　渡邉隆行（同主幹：係総括）
行時桂子（同主幹）、井上純（同主査）、矢羽田幸宏（同主査 ～ 7 月）
報告書
作成担当者　上原翔平（同主査）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

下道遺跡は、日田盆地のほぼ中央、花月川と三隈川に挟まれた標高約 86 mの沖積地に位置する。この下道遺跡の周辺は、縄文時代から古墳時代の遺物が確認された瀧ヶ本遺跡 (8)、弥生時代後期に周囲の微高地を選定し、そこに集落を形成したとみられる下中城遺跡 (2) が所在する。また、調査地北西には弥生時代を通じて日田の拠点的な集落とその支配者層のものと考えられる特定集団墓が発見された吹上遺跡 (7) が所在し、調査地北の沖積地上には弥生時代後期から古墳時代の集落が確認された一丁田遺跡 (6) が所在する。このほか、日田条里遺跡飛矢地区 2 次調査 (11-1-2) からは、弥生時代後期の遺物が多数に出土した溝が確認されている。

古墳時代については、大波羅丘陵の南斜面には古墳時代中期の円筒埴輪が出土した薬師堂山古墳 (9) のほか、古墳時代後期の集落が確認された日田条里遺跡飛矢地区 1 次 (11-1-1) と千躰地区 (11-2) が所在する。

古代～中世においては、水田層が確認された日田条里四反畑地区 (11-3) のほか、南西には古代の住居が確認された日田条里大原地区 (11-4)、赤迫遺跡 A 地区では溝状遺構が確認され、多くの木製品が出土している。

このほか、官衙関連施設と推測されている大波羅遺跡 (10) や、日田条里遺跡飛矢地区 2 次、慈眼山遺跡 3 次調査が所在する。

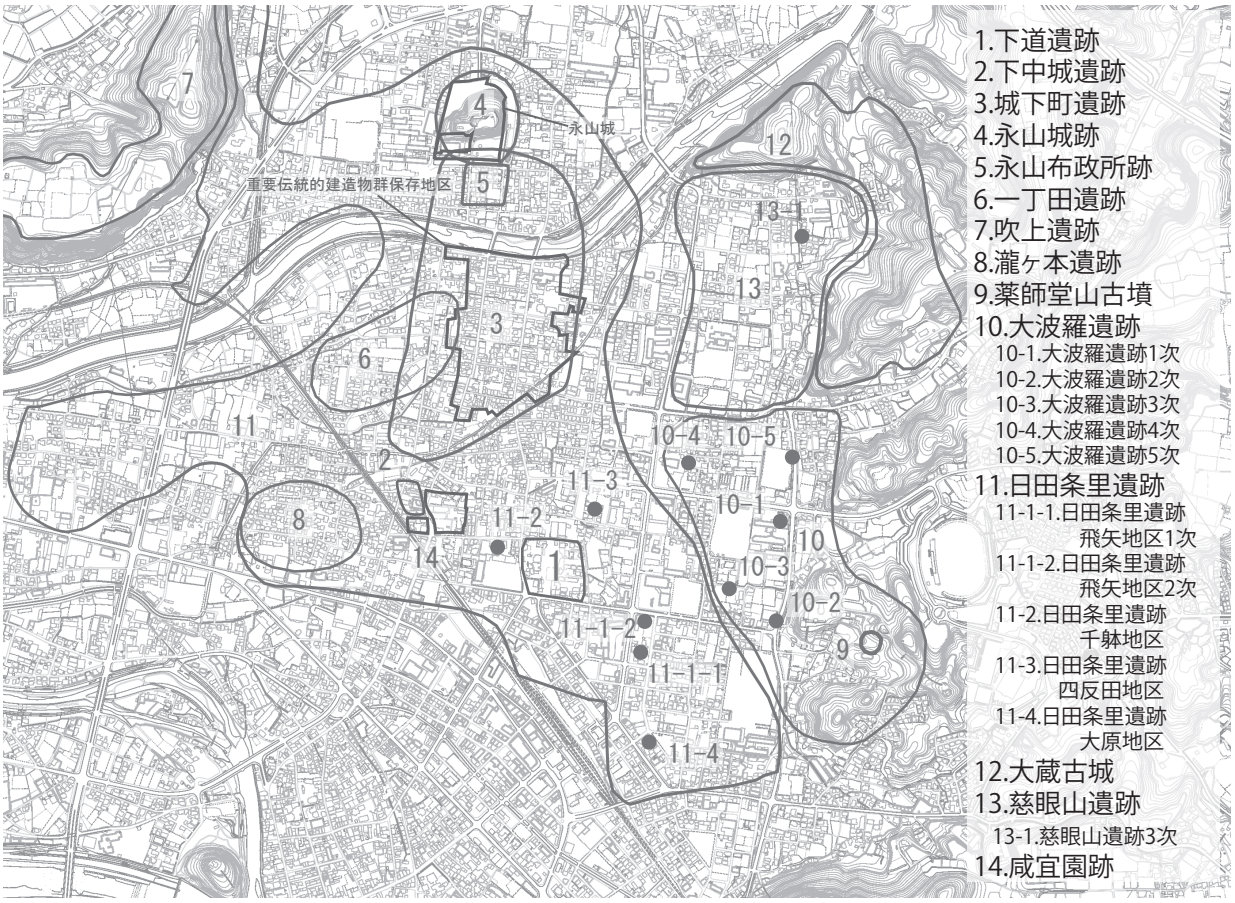
中世の時期は、250 年にわたり日田を治めた中世大蔵姓日田氏の居城であった大蔵古城 (12) とその眼下には中世の堀や石垣状の遺構、大規模な整地層の上面に掘立柱建物が確認され、中世の屋敷跡が広がると考えられる慈眼山遺跡 (13) などが所在する。

また、近世においては、調査地の西に、江戸後期から明治期にかけて全国から 5,000 人もの門下生を受け入れ、多くの著名人を輩出した私塾咸宜園 (14)。そして、北には日田の商人町として江戸期から明治期以降も発展し、平成 16 年には国の重要伝統的建造物群保存地区として選定された豆田町が所在し、その大部分は城下町遺跡 (3) に含まれている。このほか、城下町遺跡の更に北側には、平成 28 年に県の史跡指定を受けた永山城跡 (4)、西国筋郡代の陣屋であった永山布政所跡 (5) が所在する。

下道遺跡の所在する地域は、古代律令下では『豊後国風土記』に伝えられる日田五郷のうち、鞍編郷に属していたと推定され、これまで多くの古代期の遺跡が調査されている。

なかでも、大波羅遺跡 5 次調査からは、直径 30 ㎝以上の大きな柱木が立ったままの状態で建物群を囲むように並んで見つかった大型柱穴列、5 間× 2 間の四面庇付き掘立柱建物が検出され、官衙的な要素を持った遺跡と考えられている。また、大波羅遺跡 1 次調査では、区画溝と想定される溝の内側に掘立柱建物などが確認されていることや「山」「田」銘の墨書土器や転用硯・瓦が出土することなどから、ある程度階層の高い人物の居館または寺院関連施設が推測されている。そして、日田条里遺跡飛矢地区 2 次では、その機能は不明だが、官衙の関連施設と推定されている大型の溝が確認されているほか、慈眼山遺跡 3 次調査では、住居などは確認されていないものの井桁組の井戸や「林」「門」銘の墨書土器等が出土していることから、公的施設または有力者の屋敷が想定されるなど、これらの遺跡は古代の官衙関連施設の広がりを考える上で貴重な成果となっている。

《参考文献》　『日田市史』 日田市　1990　ほか　日田市教育委員会発行の関係遺跡報告書など



第 1 図　周辺遺跡分布図（1/20,000）

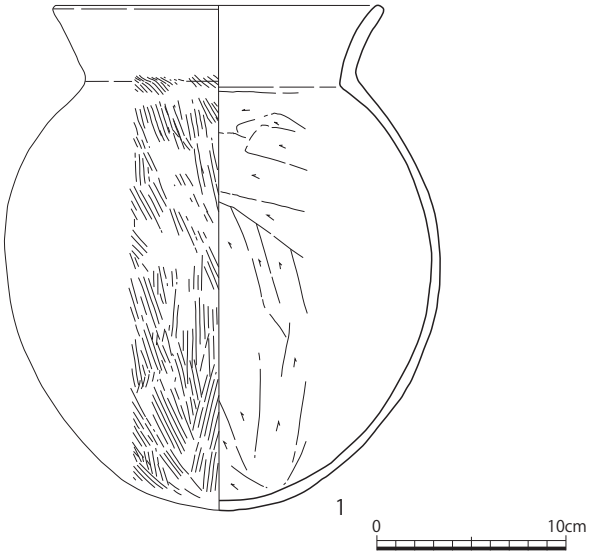
Ⅲ　調査の記録

（1）調査の概要（第２図、写真図版 1）

調査地は、大分県日田市淡窓 1 丁目 315-2 に位置し、標高は約 86m の沖積地上に所在する。事前の確認調査は、4 本のトレンチを設定して行った。対象地の南側に設定した 1 トレンチでは、現地表面より約 70cm 下で竪穴建物や土坑を確認した。小土坑からは、土師器甕（第３図）が出土している。この甕は、外面の縦ハケ、内面のケズリ調整に加え、口縁部が若干外反して立ち上がる特徴から 5 世紀末～ 6 世紀頃のものと考えられ、このことから南側で確認された遺構については、古墳時代中期末～後期頃と考えられる。また、対象地北側の建物建設予定地に設定した 2 ～ 4 トレンチでは、現地表面から約 80 ～ 120cm 下で溝状遺構や小土坑を検出した。遺構検出面が南から北に向かって深くなっていることから、旧地形は南から北側に向かって緩やかに傾斜しているとみられた。

以上の結果を踏まえて、遺跡を破壊する基礎部分のみの小範囲での調査では効率が悪く、全体の把握が困難であることから、建物の建設範囲（232.6 ㎡）の内、178 ㎡を調査範囲として遺構検出した。その内、建物基礎によって遺構が破壊される範囲である 49 ㎡を遺構掘り下げの対象とした。

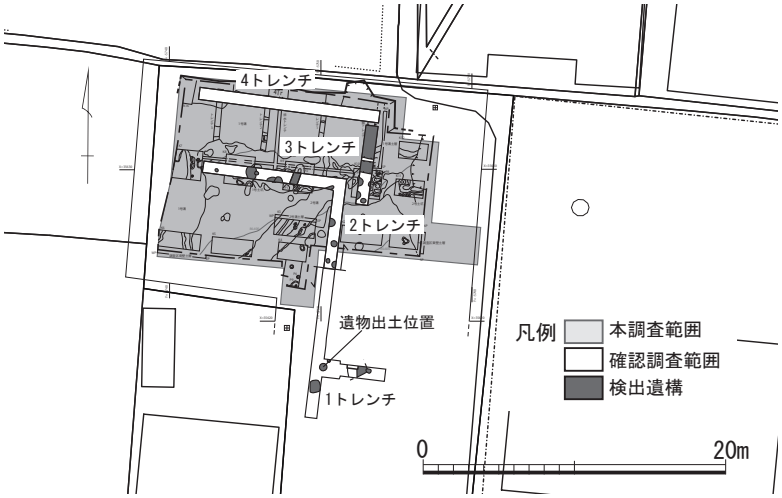
第２図　調査地周辺図（1/2,000）



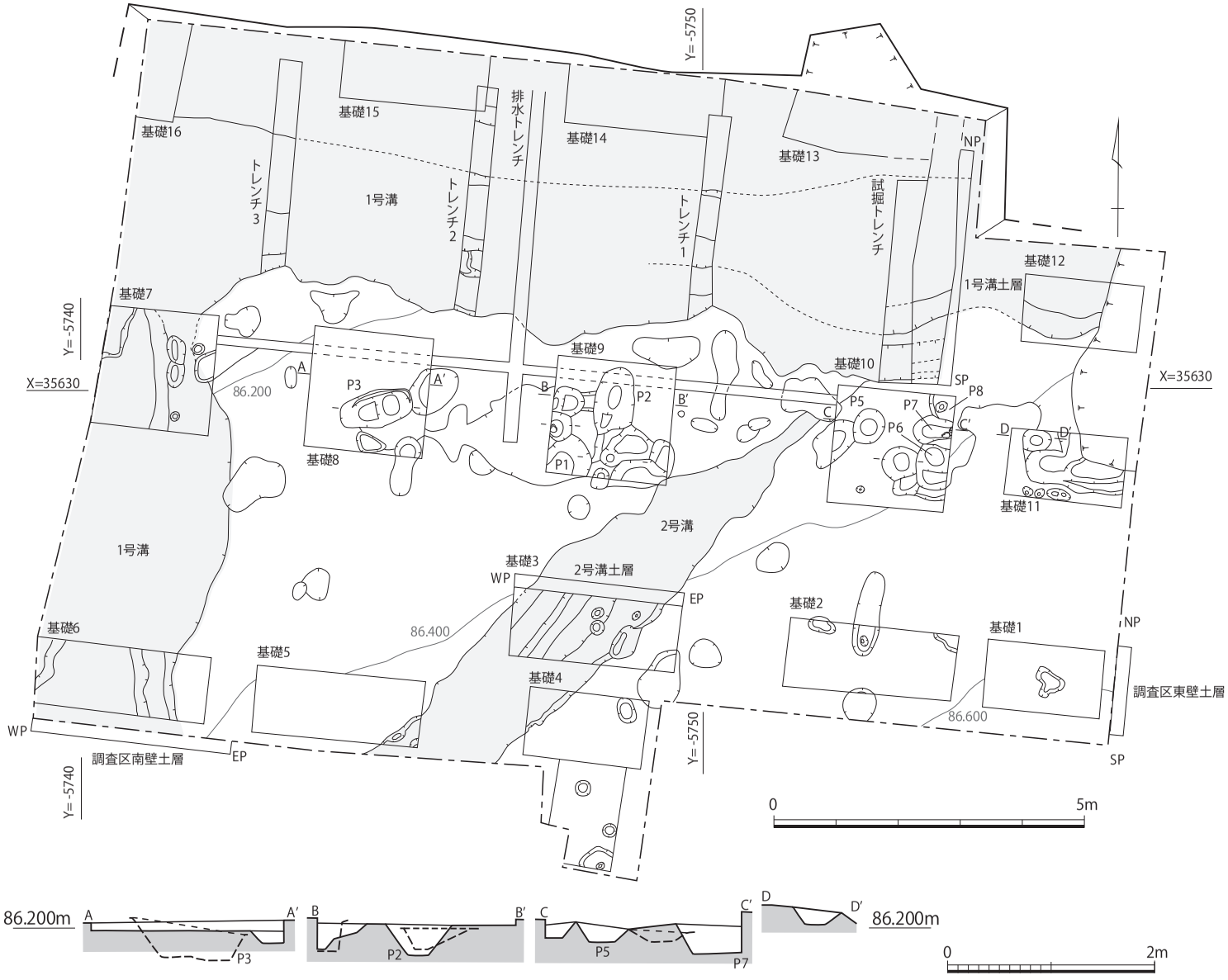
第３図　確認調査出土遺物（1/4）

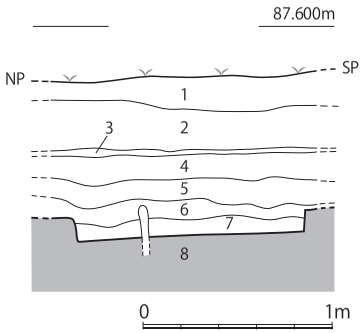
調査は、重機により表土除去を行い、現地表面から約 80 ～ 90cm 下で黄褐色土の地山 (第 5 図 8 層) を検出した。

遺構検出によって調査地内の遺構の把握を行い、建物基礎によって破壊される範囲については遺構の掘下げと記録保存を行った。なお、調査対象地北側には水路が流れており、大雨時に敷地内の土壁が崩落し、水路から大量の水が流入したことから、安全を考慮してこの範囲の基礎（基礎 13 ～ 16）の掘下げは断念した。



第４図　確認調査トレンチ配置図（1/500）





1. 表土
2. 淡褐色土
3. 明褐色土・橙色マンガン沈殿層・基盤土
4. 明黒褐色土
5. 黒褐色土
6. 淡黒褐色土
7. 暗褐色土 (地山漸移層)
8. 黄褐色土 (地山)

調査地東壁土層図 (1/40)

第 5 図　調査地全体図（1/100）、小土坑断面図（1/60）及び東壁土層図（1/40）

（2）遺構と遺物（第５～９図、写真図版 1）

調査では、調査地内を南から北、そして東から西へとＬ字状にめぐる１号溝やそれに流れこむように南西から北西へと入る２号溝と１号溝に沿うように並ぶ小土坑を多数検出し、これらの遺構からは主に古代と中世に比定される須恵器片や陶磁器片が出土している。

１号溝（第６図、写真図版 1）

床面のレベルなどから調査地西端を南から北へ流れ、調査地の北端では西から東に向かって流れる。南端及び東端ともに調査地外まで広がるため、この溝の平面プランや総延長などは不明である。

規模は、最大幅が約 3.5 m＋α、長さは 21.0m+ α で深さは約 40cm を測る。断面形状は、浅い逆台形状を呈する。

南壁側の土層観察 (第６図 - 1) では、自然埋没と思われる５～８層と地山ブロック土が多く含まれる９～ 13 層で埋没過程が異なっており、同様に１号溝土層断面 (第６図 - 2) の土層観察では、2・3 層、5 ～ 15 層の２箇所で異なる掘り込みと埋没過程がみられ、1・4 層で中広く埋没する状況が確認される。こうしたことから、この溝は複数回掘り直されて最終的に大きな溝として機能したものと考えられる。

出土遺物（第７図、写真図版７）

２は土師器甕で口縁部が外反しながら立ち上がる。３～５は須恵器甕である。３は口縁部が肥厚している。4 は外面にカキ目がみられ、５は内面に青海波状タタキがみられる。６～９は須恵器坏蓋である。６はつまみが付き、７は口縁端部に低いかえりが付く。８はかえりがなく、端部を内側へ屈曲させている。９は口縁部を嘴状につくり、端部を下方へ引き出している。10・11 は須恵器坏身である。10 は底部で高台がやや内側に貼り付けられている。11 は底部にヘラ記号が刻まれている。12・13 は土師器坏である。12 は、長めの高台が外側に貼り付けられている。13 は、口縁が若干外反しながら立ち上がる。14 は、土師器甑の把手である。15 は白磁の椀で口縁部が玉縁になっている。16 は青磁皿である。なお、それぞれの出土位置は２・5・10 は基礎７から、3・11 は３トレンチから、4・6・15・16 は基礎 13 から、6・15・16 は基礎 13 から、7・13 は基礎６から、14 は基礎 12 から出土している。

２号溝（第９図、写真図版２）

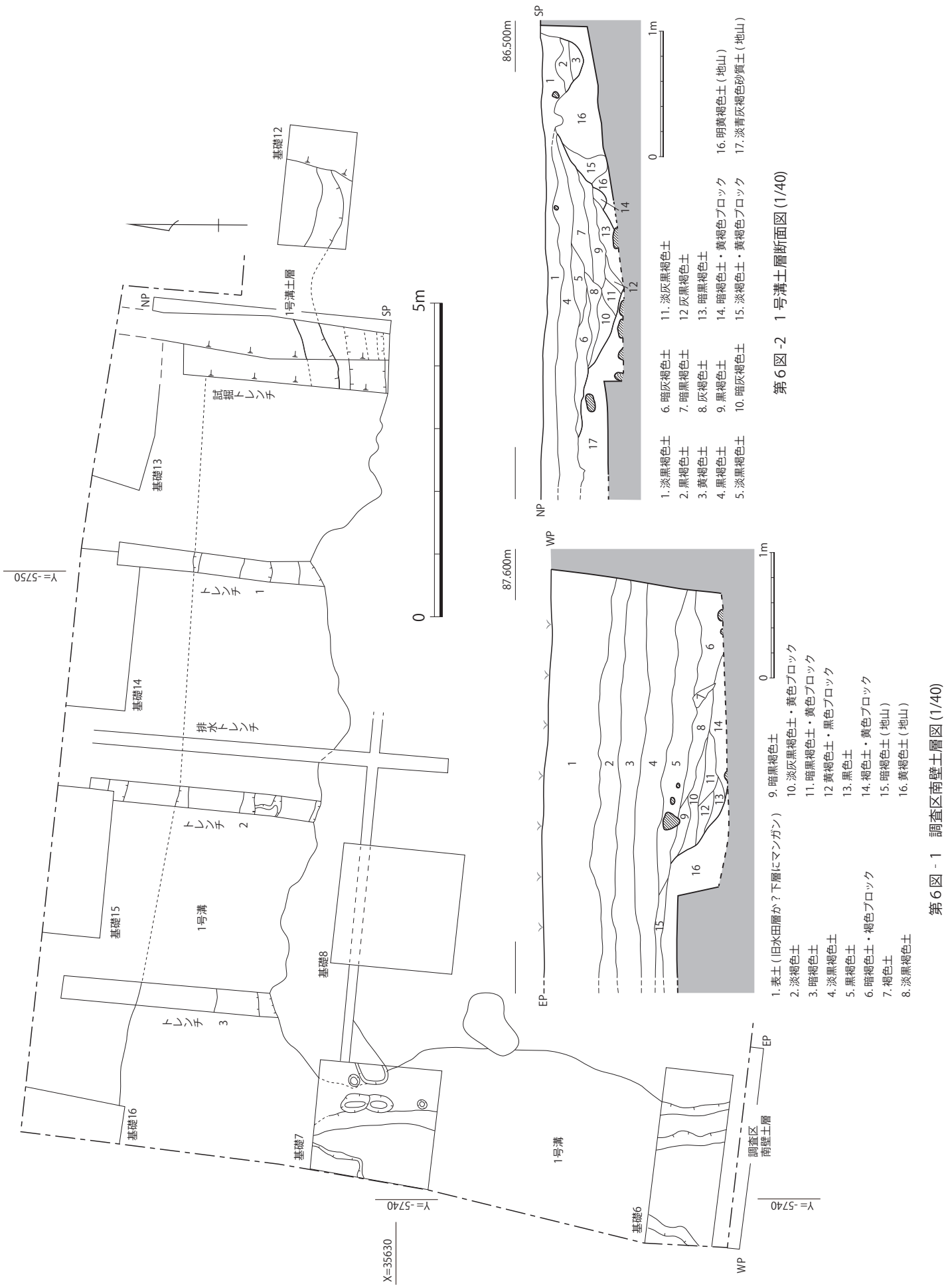
調査地中央を南西から北東に向かって伸びている。規模は、最大幅が約 1.8m、長さは 9.5 m + α で深さは約 10 ㎝である。断面形状は、浅いＵ字状を呈する。

出土遺物は、土師器片などが数点出土しているが、いずれも小片で図示できるものは無かった。

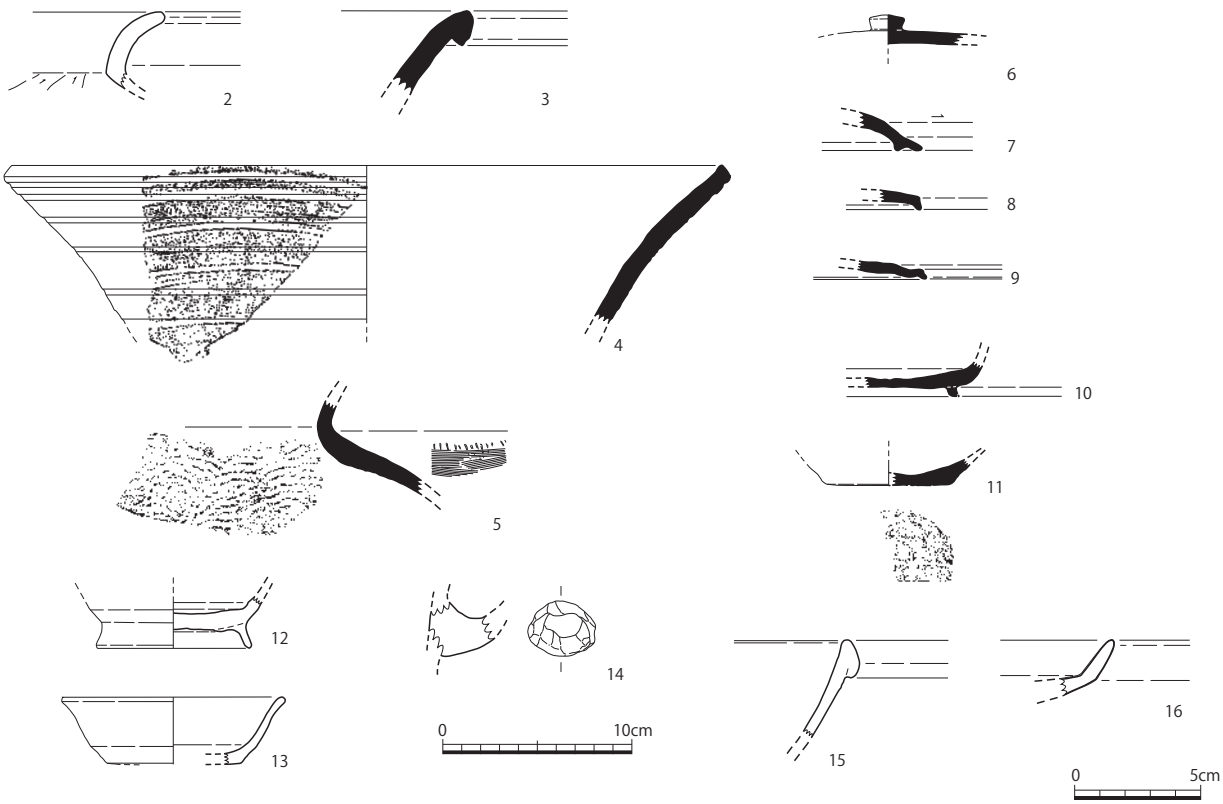
小土坑（第５図）

小土坑は、調査地中央付近、１号溝の南側に並ぶように多数確認されている。これらから出土した遺物の時期は１号溝とほぼ同じであること、また同じ個所に複数回掘り直されていることから、１号溝に付属する柵などの施設に伴うものであった可能性が考えられる。

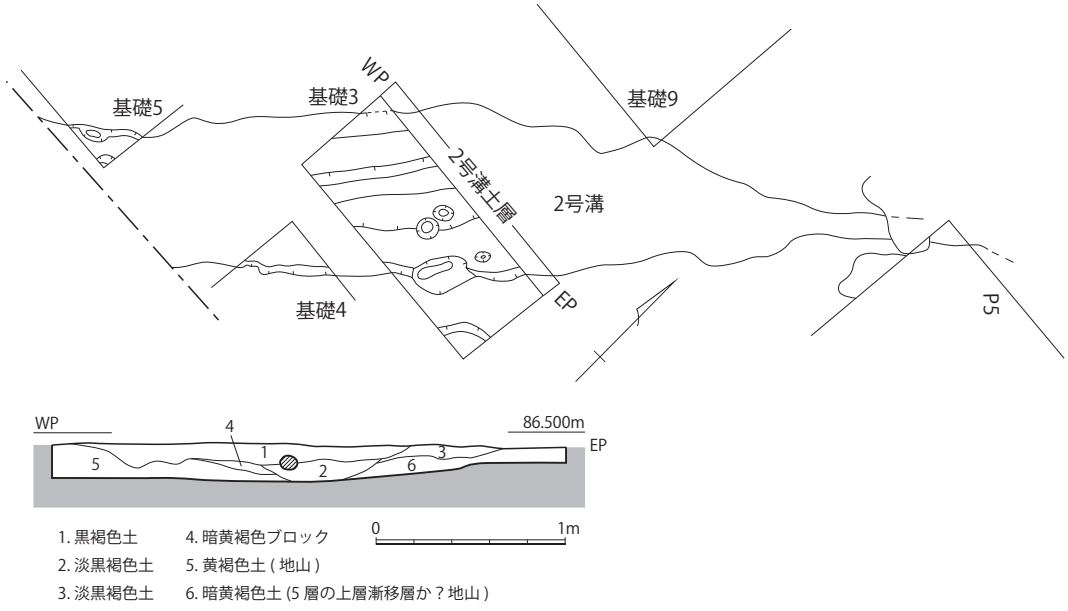
出土遺物（第９図、写真図版７）は、須恵器の他、青磁や陶器が出土している。17 は口縁端部にかえりがつく。18 はＰ１から出土した須恵器坏身で底部立ち上がり付近に高台がつく。高台は短く、外側に伸びる。19 は P8 から出土した青磁碗で、内外面に文様を有する。20 は陶器のすり鉢である。なお、17 は基礎 9、20 については、基礎 11 から検出されたものであるが、小土坑が多く切り合う状況からいずれかの小土坑に伴うものと考えられる。



第６図　１号溝実測図（平面図：1/80、土層図：1/40）

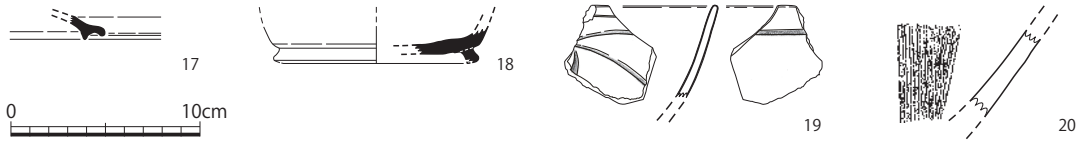


第 7 図　1 号溝出土遺物（1/4）



2 号溝土層断面図 (1/40)

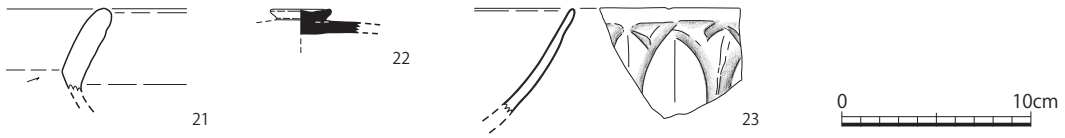
第 8 図　2 号溝実測図（平面図：1/80、土層図：1/40）



第 9 図　小土坑出土遺物実測図（1/4）

その他の遺物（第 10 図）

検出時に出土した遺物である。21 は土師器甕、22 は宝珠つまみが残る須恵器蓋で、23 は外面に鎬が残り、蓮弁文を有する青磁片である。



第 10 図　検出時出土遺物実測図（1/4）

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、これまでみてきたように、調査地内で溝 2 条と柵などの施設に伴う可能性がある小土坑を検出した。

1 号溝については、出土した須恵器坏蓋（7）の口縁端部の浅いかえりや須恵器坏身（10）の高台の位置などから中村編年Ⅳ‐1 期または牛頸窯編年Ⅵ期が想定され、須恵器坏蓋（8・9）のかえりの無い口縁や嘴状の口縁端部の特徴から中村編年Ⅳ‐2 期または牛頸窯編年ⅦA 期頃の 7 世紀末～ 8 世紀前半代までの時期と、白磁碗（15）口縁の玉縁の特徴から大宰府編年の白磁椀Ⅳ類、青磁皿（16）は体部中位で屈曲し、口縁に向かう特徴から青磁皿Ⅰ類の 12 世紀前半～中頃の時期が想定される。また、土師器埦（12・13）は、高台の長さや体部から口縁に向かって立ち上がる特徴から中島恒次郎氏が分類した B（古代後期）の 9 世紀末～ 10 世紀代の時期を想定したい。

埋土の堆積状況から 2 回以上の掘り直しが確認されており、出土遺物の時期と合わせて考えると、この溝の埋没時期は少なくとも 2 ～ 3 時期に分かれるとみられる。また、調査地は北から南に向かって旧地形が高くなっていることから、少なくとも東西方向では、旧地形の低地部分に沿って掘り込まれていた可能性がある。なお、2 号溝の時期は不明である。

そのほか、1 号溝の南側で多くみられた柵などの施設に伴う可能性のある小土坑群からは、出土遺物は少ないものの、須恵器坏蓋（17）、須恵器坏身（18）や内面に割花文を簡略化したとみられる龍泉窯の青磁碗（19）が出土している。その特徴から須恵器は中村編年Ⅳ-2 期または牛頸窯編年ⅦA 期頃の 7 世紀末～ 8 世紀前半、青磁碗は大宰府編年青磁椀Ⅱ類頃の 12 ～ 13 世紀の 2 時期が想定され、1 号溝と同時期に存続した可能性が考えられよう。更にこの小土坑は、1 号溝の東西方向と並行し、同じ個所に複数回にわたって掘り直されていることから、1 号溝に付属する柵のような施設であった可能性を考えておきたい。

検出時の遺物からも、8 世紀の須恵器や、蓮弁文の特徴から大宰府編年青磁椀Ⅱ類頃の 12 ～ 13 世紀代と考えられる青磁片が出土しており、溝や小土坑の時期と一致している。このほか、確認調査時に調査地南側で古墳時代中期末～後期初頭頃の小土坑が確認されており、調査地の南側には古墳時代中期末～後期初頭の遺構が広がっていた可能性が考えられよう。

以上、今回の調査成果をまとめると、

①地形に沿って調査区北端を東西方向に溝が掘り込まれており、それに並行して柵のような施設が付随し、複数回にわたって同様のタイミングで掘り直しが行われていた可能性がある。さらに調査区西端で南北に直交する溝についても、平面プランが不明で全体像が明確ではないものの、埋土の状況などから同一の溝である

可能性が考えられる。

②これらの遺構は、出土遺物から７世紀末～８世紀代、９世紀末～ 10 世紀、12 ～ 13 世紀の２～３時期にわたって複数回利用されていたと想定される。

こうした中で改めて１号溝の機能について考えてみると、古代・中世の２時期以上にわたり地形の高まり側を防衛するような目的を持った施設が想定されよう。周辺の調査では、大波羅遺跡１次調査で有力者層の居宅を区画すると考えられる溝が確認され、慈眼山遺跡３次調査では井戸の存在から有力者層の居宅の存在が想定されている。本遺跡の周辺では古代の有力者層の居宅などの施設が広がり、また大波羅遺跡５次調査では大型柱穴列などから公的施設の存在も確認されている。こうした状況を勘案すると、今回確認された溝についても同様ないし類似した機能を有する施設であった可能性を考えても差し支えないだろう。

《参考文献》 遺物の時期判断については、以下の文献・報告書などを参考にした。

重藤輝行　2009 「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』

中村　浩　1981 『和泉陶邑窯の研究 - 須恵器生産の基礎的考察 - 』 柏書房

舟山良一・石川健 編　2008『牛頸窯跡群 - 総括報告書Ⅰ - 』 大野城市教育委員会

宮崎亮一 編　2000 『大宰府条坊跡 XV』 太宰府市教育委員会

中世土器研究会 編　1995 『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社

九州近世陶磁学会 編　2000 『九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会 10 周年記念 - 』

第１表　出土土器観察表

図版番号		出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第３図	1	試掘 トレンチ	土師器	甕	17.0	26.7	-	22.9	ヘラケズリ	ハケ目	B・A・C・D	良	にぶい 橙色	7.5YR6/4	橙色	5YR6/6	外面に黒斑 スス付着
第７図	2	１号溝 （基礎７）	土師器	甕	-	（4.0）	-	-	横ナデ ヘラケズリ	横ナデ	C・A・D	良	にぶい 黄色	7.5YR6/4	にぶい 黄色	7.5YR7/4	
第７図	3	１号溝 ３トレンチ	須恵器	甕	-	（4.4）	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B・E	良	灰色	N4/1	灰色	N4/1	全面に自然釉がかかる
第７図	4	１号溝 （基礎 13）	須恵器	甕	（37.6）	（8.3）	-	-	回転ナデ	カキ目	B	良	褐灰色	7.5YR6/1	黄灰色	2.5Y4/1	外面に沈線が巡る
第７図	5	１号溝 （基礎７）	須恵器	甕	-	（5.0）	-	-	回転ナデ	回転ナデ タタキ後ハケ	A・C	不良	にぶい 黄橙色	10YR7/3	灰白色	5YR8/1	
第７図	6	１号溝 （基礎 13）	須恵器	坏蓋	-	（1.5）	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B	良	灰白色	7.5YR7/1	灰白色	7.5YR8/1	
第７図	7	１号溝 （基礎６）	須恵器	坏蓋	-	（2.0）	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B	良	灰黄褐色	10YR6/2	灰色	7.5YR6/1	
第７図	8	１号溝 ２トレンチ	須恵器	坏蓋	-	（1.0）	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B	良	黄灰色	2.5Y6/1	灰色	2.5Y7/1	
第７図	9	１号溝 １トレンチ	須恵器	坏蓋	-	（0.9）	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B	良	灰色	N7/1	灰色	N7/1	
第７図	10	１号溝 （基礎７）	須恵器	坏身	-	（1.8）	-	-	回転ナデ	回転ナデ 工具ナデ	E	良	灰白色	N7/1	灰白色	N7/1	
第７図	11	１号溝 ３トレンチ	須恵器	坏身	-	（1.3）	（6.5）	-	回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	にぶい 赤褐色	2.5YR5/4	灰赤色	2.5YR5/2	底部外面に ヘラ記号有り
第７図	12	１号溝	土師器	埦	-	（2.7）	（8.0）	-	横ナデ	横ナデ	C・A・D	良	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
第７図	13	１号溝 （基礎６）	土師器	坏	（11.6）	（3.5）	（7.0）	-	横ナデ	横ナデ	A・C・E	良	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	
第７図	14	１号溝 （基礎 12）	土師器	甑	-	（2.9）	-	-	工具痕 ナデ	工具痕 ナデ	A・C・D	良	淡橙色	5YR8/4	橙色	5YR7/6	把手部分
第７図	15	１号溝 （基礎 13）	白磁	碗	-	（3.8）	-	-	-	-	F	良	灰黄色	2.5Y7/2	灰黄色	2.5Y7/2	
第７図	16	１号溝 （基礎 13）	青磁	皿	-	（2.2）	-	-	-	-	F	良	明緑灰色	10GY7/1	明緑灰色	10GY7/1	
第９図	17	検出 （基礎９）	須恵器	坏蓋	-	（1.2）	-	-	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	B	良	灰色	N6/1	灰色	N6/1	
第９図	18	P1 （基礎９）	須恵器	坏身	-	（1.9）	（10.8）	-	回転ナデ	回転ナデ	B	良	灰色	5YR5/4	灰色	N4/1	
第９図	19	P8 （基礎 10）	青磁	碗	-	（3.9）	-	-	-	-	F	良	灰オリーブ色	2.5GY6/1	灰オリーブ色	2.5GY6/1	
第９図	20	検出 （基礎 11）	陶器	擂鉢	-	（3.4）	-	-	-	-	B	良	にぶい 赤褐色	2.5YR5/3	にぶい 赤褐色	2.5YR5/3	
第９図	21	検出	土師器	甕	-	（4.4）	-	-	横ナデ ケズリ	横ナデ	A・C・E	良	にぶい 褐色	7.5YR6/3	にぶい 褐色	7.5YR6/3	
第９図	22	検出	須恵器	坏蓋	-	（1.3）	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B	良	灰色	N4/1	灰白色	10Y7/1	
第９図	23	検出	青磁	碗	-	（4.3）	-	-	--	-	F	良	灰オリーブ色	7.5Y6/2	灰オリーブ色	7.5Y6/2	連弁文

法量の単位はcm。（）書きは、残存と復原を表す。

胎土：Ａ角閃石　Ｂ石英　Ｃ長石　Ｄ赤色粒子　Ｅ白色粒子　Ｆ黒色粒子　Ｇ雲母　Ｈ砂粒

遺構検出状況（東から）

遺構検出状況（南から）

調査地発掘状況（東から）

写真図版 2

調査地発掘状況（南から）

基礎１完掘状況（北から）

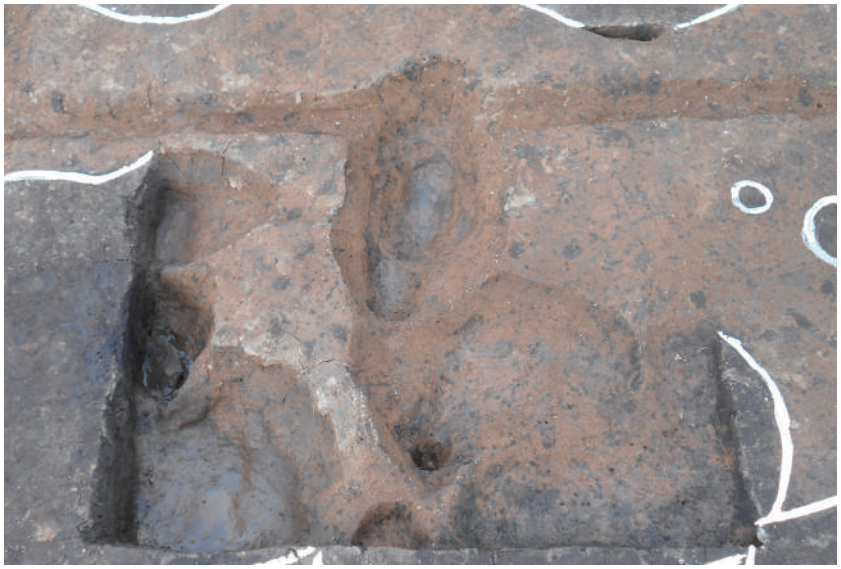
基礎２発掘状況（北から）

基礎４発掘状況（北から）

基礎５発掘状況（北から）

基礎８発掘状況（南から）

写真図版 4



基礎９発掘状況（南から）

基礎 10 発掘状況（南から）

基礎 12 発掘状況（南から）

調査地東壁土層断面（西から）

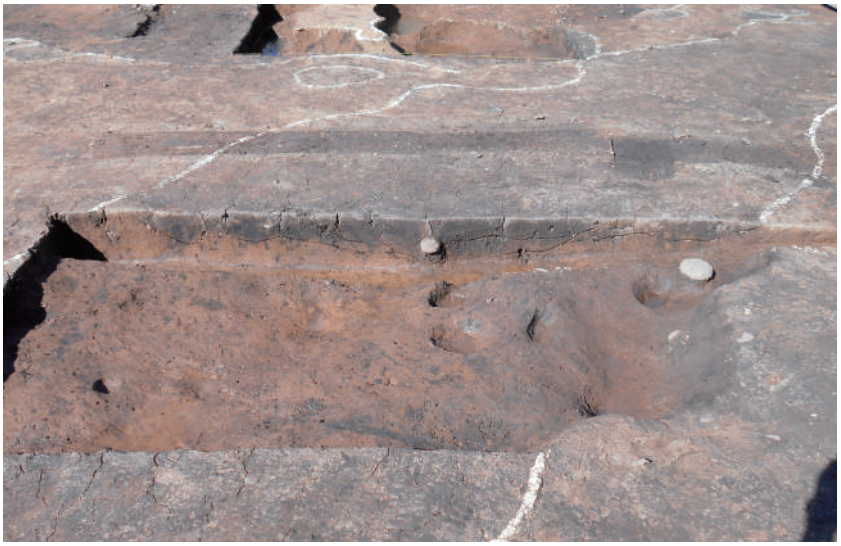
1 号溝土層断面（西から）

1 号溝土層断面（北から）

写真図版 6

1 号溝発掘状況：基礎 7 （東から）

1 号溝発掘状況（北から）



2 号溝土層断面（南から）

3-1

7-6

7-3

7-11

9-18

7-5

7-12

10-23

7-10

7-15

10-22

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しもみちいせき
書　　名	下道遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書・市内遺跡発掘調査報告
シリーズ番号	第 140 集・20
編 著 者 名	上原　翔平
編 集 機 関	日田市教育庁文化財保護課
所　在　地	〒 877-8601　日田市田島 2 丁目 6 番 1 号 （電話：0973-24-7171、FAX：0973-24-7024）
発 行 機 関	日田市教育委員会
所　在　地	〒 877-8601　日田市田島 2 丁目 6 番 1 号
発行年月日	2022 年 3 月 30 日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下道遺跡	大分県日田市 淡窓 1 丁目	44204-6	204382	33°　19′　16″	130°　56′　17″	170914 ～ 171028	178 ㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下道遺跡	集落	古代 中世	溝、小土坑	土師器、須恵器、陶磁器	

要　約	下道遺跡は、日田盆地のほぼ中央、三隈川と花月川の河川作用によって形成された標高約 86 mの沖積地に位置する。今回の調査では、溝 2 条と柱穴の可能性のある小土坑が確認された。これらの時期については、出土遺物などから 1 号溝は、7 世紀後半～ 8 世紀前半代、9 世紀末～ 10 世紀、12 ～ 13 世紀の 2 ～ 3 時期に分けられ、小土坑については、1 号溝と同様に古代と中世の 2 時期以上あると想定され、また 1 号溝に並行して検出されることなどから 1 号溝に伴う柵などの付属施設の可能性が考えられた。 調査の結果、1 号溝は地形の低い部分を掘り込み、柵のような付属施設を持っていた可能性があることから、防御的な機能を持った施設であったと想定された。また、調査地周辺の遺跡からも同時期の遺構が多く確認されていることから、当該期の遺跡の広がりを考える上でも重要な成果があったといえる。

下道遺跡

市内遺跡発掘調査報告 20

日田市埋蔵文化財調査報告書第 141 集

2022 年 3 月 30 日

編集　日田市教育庁　文化財保護課
　　877-8601　大分県日田市田島 2 丁目 6 番 1 号
発行　日田市教育委員会
　　877-8601　大分県日田市田島 2 丁目 6 番 1 号
印刷　株式会社インデバイス